



2013-2014 年
RI会長 ロン パートン
第 2640 地区ガバナー 久保治雄



海南東ロータリークラブ

ROTARY CLUB OF KAINAN EAST

RI District 2640 Japan

第 1773 回例会

平成 26 年 1 月 27 日(月)

12:30～ 海南商工会議所 4F

1. 開会点鐘

2. ロータリーソング 「それでこそロータリー」

3. 出席報告

会員総数 51 名 出席者数 35 名

出席率 70.00% 前回修正出席率 70.00%

4. 会長スピーチ



会長 小椋 孝一 君
皆さん、こんにちは。今日の会員卓話には海南商工会議所 会頭上中嗣郎さんであります、よろしく御願い致します。

ここで、1月24日(金) 海南市、紀美野町に嬉しい吉報が届いて来ました。この地区の県立海南高校野球部が、春の甲子園の21世紀枠で見事出場することが出来ました。大変喜ばしい事です。

今月は、ロータリー理解推進月間です。北中登一パストガバナーが理解推進月間について書いてあったので一部紹介します。今ここに来て、もう一度ロータリーとは何か、原点に帰り、考える必要があるのではないかと思う昨今である。言うまでもなく、ロータリーの基本理念は職業奉仕であり、根底を流れる理想はジェルドンの述べたように、「he profits most who Serves best」である。これは真理であり、誰がどう解釈しようと勝手であるが、真理は真理であり、いつの時代も変わる事はない。これは日本語で言うと、正に「自利利他」の精神であり、大乘仏教の基本精神となっている。ロータリーはもう一度、原点に帰り、しっかりと職業意識を持つことが必要ではないか。職業とは、何のための職業か。食べるためである。つまり、生きるために私たちは働いているのだ、そのと

おりであろう、だから生業(なりわい)という。私たちは、つまりは自分のために働いているのである。しかし、私たちの職業は、職業として成り立っているのは、世の中がそれを必要としているからであろう。必要としないなら、その職業はとうに消えて無くなってしまっているはずではないか。つまり、私たちが自分のために働いている。そのことがそのまま皆のために、なっているということになるのである。私たちの職業は、自分の利すると同時に他をも利しているというわけである、この様なことを「自利利他同時」という、奉仕とは、他を利する事をいう、だから私たちが日々の自分の仕事に精を出す事、その事がそのまま大きな奉仕の行を行じていることになるのである。

5. 幹事報告

幹事 大谷 徹 君

○例会臨時変更のお知らせ

和歌山東南RC 2月12日(水)→ 2月12日(水)

18:30～ ロイヤルパインズホテル

(和歌山南RCとの合同例会)

岩出RC 2月13日(木)→ 2月8日(土)

13:30～受付 14:00 開演 16:00 終演予定

(きさらぎコンサート With 第9合唱)

岩出市総合体育館小ホール

2月20日(木)→ 2月20日(木)

13:00～ 橋本カントリークラブ

旧IM4組 合同例会

粉河RC 2月19日(水)→ 2月20日(木)

橋本カントリークラブ

旧IM4組 合同例会

2月26日(水)→ 2月26日(水)

12:00～ 名手公民館

(外部卓話)

○休会のお知らせ

新宮RC 2月5日(水)

和歌山東南RC 2月26日(水)

○2月のロータリーレート

1\$ = 102円

1月はロータリー理解推進月間です

四つのテスト 貴行はこれにたからしてから

- ①真実かどうか ③好意と友情を深められるか
- ②みんなに公平か ④みんなのためになるかどうか



事務所 〒642-0002 海南市日方 1294(海南商工会議所内)

電話(073)483-0801 FAX(073)483-2266

会長: 小椋 孝一

幹事: 大谷 徹

SAA: 重光 孝義

<http://www.kainaneast-rc.jp>

E-mail: info@kainaneast-rc.jp

○国際奉仕委員会

○出席委員会

○研修委員会

A portrait of a middle-aged man with grey hair and glasses, wearing a dark suit, white shirt, and dark tie. He is smiling and speaking into a microphone. In the background, a yellow gear-like logo is visible, along with the letters 'N E' and 'A N'.

アベノミクスの三本の矢

「安倍+エコノミクス(経済学)」の造語

公共事業
道路や橋などを造ったり直したりする

金融緩和
日本銀行が国債を大量に買って
市場に出回るお金を増やす

成長戦略
企業活動のために
ルールをやらせたり
新産業を発展させたりする

デフレ脱却

デフレ
(モノの値段が下がりが続ける状態)からの脱出をめざす

失敗すれば
借金の山の
おそれも

[Home](#)
[About Us](#)
[Our Services](#)
[Our Clients](#)
[Our Projects](#)
[Our Team](#)
[Contact Us](#)

再建の方が優先されるのは明らかである。

日本におけるデフレの原因は人口減少であり、日銀にその責任を転嫁するのは間違いだ。に対し、ドイツやイタリアなど人口が減少している国は他にもあるが、長期的なデフレに陥っているのは日本だけである。デフレの根本的な原因は日銀のとってきた消極的な金融政策スタンスにある。デフレとはあくまで貨幣現象であり生産年齢人口の減少にその原因があるとする考えは日銀の責任転嫁にすぎない。



政府における意図的な円安誘導は通貨安競争を招きかねないに対し、デフレ脱却を目的とした金融政策の中で市場の期待が円安という形で表れただけである。

そもそもリーマンショックの後、世界各国が金融緩和を進める中で日本だけが円高という苦しみに耐えてきた。今はその過度な円高の修正局面にすぎない。日本経済の再生は長期的に見れば世界経済にとってもプラスになる。

物価目標を2%に上げることで資産バブルやハイパーインフレを招くのではないかに対し、これまで日銀の「1%を目処」とした政策ではデフレ脱却には至らなかった。インフレ期待とは正に期待であり、国民と市場に訴えかけて初めて効果が表れる。その意味で2%の物価目標は、経済的に成熟した国家に必要なマイルドなインフレ（1%前後）を生み出す原動力としてインパクトある数値だと考える。そもそも、2%の目標達成を疑う声がある中で、資産バブルやハイパーインフレを危惧するのはあまりにも飛躍した考えである。

8. 閉会点鐘

次回例会

第1774回例会 平成26年2月3日(月)
海南商工会議所 4F 16:30～
お誕生お祝・ご結婚記念日お祝い
ゲスト卓話 米山記念奨学生
アーマド・シャキル・ビン・アズミ 君



ニコニコ・BOX

宮田 敬之佑 君	海南高校の甲子園出場、皆さんの応援をお願いします。
上中 嗣郎 君	本日卓話致します。
小椋 孝一 君	県立海南高校春の甲子園出場おめでとう！
大谷 徹 君	上中会頭、本日卓話ご苦労様。海南市の為がんばって下さい。

Rotary ローター・ジャパン

2014-15 年度のテーマ

「ロータリーに輝きを」(Light Up Rotary)

国際ロータリーの黄其光(ゲイリー C.K. ホアン：台湾) R I 会長エレクトは2014-15年度のテーマ「ロータリーに輝きを」(Light Up Rotary)を発表しました。



ホアン会長エレクトは、「ただ座って暗闇を呪うよりも、ロウソクを灯したほうがいい」とロータリー設立の約2,400年前



を生きた中国の思想家、孔子の言葉を引用し、孔子の教えに心を動かされたと述べました。さらに、「世界には問題が山積みとなっており、大勢の人が助けを必要としています。しかし、“自分にできることはない”と言って、何もせずにただ座っている人が大勢います。これでは、何もかも暗闇のままです」

「ロータリーの考え方は、孔子と同じです。ロウソクを灯すのがロータリーです。私が一本、あなたが一本。こうして、120万人の会員全員がロウソクを灯します。力を合わせれば、世界を光で輝かせることができるのです」とテーマの趣旨を述べました。

2014 年「ザ・ロータリアン」誌 写真コンテスト

今年度も「ザ・ロータリアン」誌が主催する写真コンテストが開催されます。

クラブの活動や特別行事、リスボン国際大会や海外プロジェクトの様子など、あなたが撮影した会心の一枚をご応募ください。受賞者には、レンズ付き一眼レフカメラ、またはウルトラズーム・オートフォーカス・カメラが贈られます。審査には、ピューリッツァー賞を受賞した写真家、David Hume Kennerly 氏が行われます。



応募作品は、2013 年か 2014 年に撮影された写真3枚までとします。応募締切日は2014年2月28日です。賞品は、最優秀作品(1名)：レンズ付き一眼レフカメラ、優秀作品(2名)：ウルトラズーム・オートフォーカス・カメラです。

受賞作品は「ザ・ロータリアン」誌2014年6月号にて発表され、選ばれた作品は年間を通じて同誌に掲載されます。詳しくは、
<https://www.rotary.org/myrotary/ja/photo-contest>

「私は一人の女の子」 マララの思い

美しく汚れなき理想郷、タリバーンの支配下へ

ここは、パキスタン北部、カシミール地方とカイバル峠の間にあるスワート渓谷。かつては、行政長官ジェハンゼブの管理下に置かれ、豊かさと平和に満ちた生活が営まれていました。近代化を進め、男女両方に開かれた学校を建設、自動車では行くことができない遠隔地にも行政の手を届けました。



「雲を突き抜けるように山がそびえる、美しく汚れなき理想郷。人びとは、この地をシャングリラ（伝説の理想郷）と呼びました」そう振り返るのは、ジェハンゼブの孫娘であるゼブ・ジラニさんです。地元の人びとから、今でも「プリンセス・ゼブ」と呼ばれます。かつては家族が所有する鉱山でエメラルドが採れたそうです。しかし、1969年、スワート地方の主権はパキスタン政府に渡り、同地方は下降線をたどることになります。さらに、2008年にはタリバーン政権が台頭し、その後の2年間、人びとは厳格なイスラム法によって支配される生活を強いられました。政治的に敵とみなされた者は拘束され、斬首刑や鞭打ちの刑に処された人もいました。公開処刑が行われ、女性への暴力が横行し、学校も破壊されました。

ジラニさんは1979年、生活の場を米国へと移しました。その後も年に1度帰国していますが、生まれ故郷が侵略される様を目にするのはとても辛いと話します。エメラルド鉱山から得た財産もなくなってしまいました。しかし彼女は、一から集めたお金で学校を建設し、スワートからの難民のためにシェルターと薬品を提供、さらに、スワート地方に初のロータリークラブを創設しました。

教育への思い

クラブへの入会を呼びかけた最初の人たちの中に、教育者で活動家でもあるジアウディン・ユスフザイさんという人がいました。彼の娘は、今や世界の人となった、マララ・ユスフザイさんです。彼女の父親も、スワートの伝統を守ることに力を入れていました。パキスタン政府が同地域での統制を部分的に取り戻した後の2010年、彼が所属するミンゴラ・スワート・ロータリークラブ主催の音楽イベントの準備に加わっていました。タリバーンの台頭後では初めての音楽行事だったため、ロータリアンは皆、イベントの開催を強く誇りに感じていました。「脅しや暗殺が頻繁に起きていたため、何が起こるか分かりませんでした。でも、結果的に素晴らしいイベントにすることができました」

マララさんを襲った悲劇

2012年10月のある日、ジアウディン・ユスフザイさんは、総勢300名以上の校長・教師が集まった全人

教育の推進キャンペーンに参加していました。ロータリー仲間のアーマドさんに続いて演壇に上がったとき、一本の電話が入りました。「私はアーマドさんに電話を取ってもらいました。すると彼が私の耳元で、娘が通う学校のバスが襲撃されたことを告げました。目の前が真っ暗になりました。マララが標的とされたにちがいないと感じたからです。場内には私を呼ぶアナウンスが流れ、額には汗が流れていました。6分間の演説を終えるとアーマドさんがやってきて、病院に直行するよう私に言ったのです」被害者は、マララさんでした。スクールバスで帰宅中、銃を持った男が車中に押し入り、どの生徒がマララさんかを教えないと全員を殺すと脅したのです。恐怖に駆られた生徒たちは、マララさんの方を見つめるほかありませんでした。男は銃口をマララさんの頭に向け、至近距離から発砲しました。事件から6日後、戦争被害者の治療を専門とする英国バーミンガムの病院に搬送されたマララさんは、そこで昏睡状態から目覚めました。「どこの国に私はいるのですか？」とマララさんは尋ねたそうです。謙虚に振る舞いつつ、彼女は毅然として述べました。「タリバーンは私を殺そうと思ったことでしょう。でも、そうはさせません」父親には「安心して」と声をかけ、ジラニさんには「人びとを助けようとする私のことを、きっと神様が守ってくれる」と述べました。

希望を新たに

2013年3月、マララさんは、英国で2番目のパキスタン人口を抱えるバーミンガム市内の学校に通学し始めました。グリーンのセーターに身を包み、ピンクのカバンを背負ったマララさんは、頭の中に埋め込まれたチタン製プレートと、補聴器材が左耳に付いていることを除けば、普通の女の子と何ら変わりはありません。「私は一人の女の子に過ぎない」と彼女は言います。英国での勉学を開始したマララさんは、最初に、すべての子どもの教育を受ける権利を訴える署名活動を行いました。

父親は、ゴードン・ブラウン国連世界教育特使（元英国首相）の諮問役となりました。マララさんは、世界中の人が知る存在となりましたが、心の中には常に、故郷に再び繁栄の日が訪れることへの希望が宿っています。

ジラニさんは、スワート地方への物資提供を通じて、地道な支援活動が続けています。「マララさんに起こったことは本当に恐ろしいことです。しかし、これによって世界が彼女に耳を傾けることになりました。きっと、彼女の目標を支える大きな力となるでしょう。いつの日か故郷へと戻り、私たちの活動が生み出した変化を知ってもらえたらいいなと感じています」

故郷に変化をもたらすこと、これはマララさんにとっても同じ願いです。彼女の父親は、今回の事件を振り返りながら、いつか故郷に帰ることを望んでいます。「私たちの故郷、スワート渓谷に帰る日のことを夢見ています。そしたら、マララにもロータリーに参加してもらいます」

「ザ・ロータリアン」誌2014年1月号からの抜粋